

事後評価報告書(日-南アフリカ研究交流)

1. 研究課題名: 「日本・南ア両国による比較研究に基づくインドー太平洋海域の藻類の多様性と進化の解明」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 国立大学法人北海道大学大学院理学研究院 教授 堀口 健雄

2-2. 南アフリカ側研究代表者: ケープタウン大学理学部 教授 John Bolton

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

DNA バーコーディング技術を活用した南アフリカ産紅藻有節サンゴモや褐藻カヤモノリ藻類の分類の解析結果は非常に興味深く、分類学あるいは進化生物学における客観的な新知見を生み出す可能性があり、今後もさらに包括的な解析を継続することが望まれる。地理的に離れた日本と南アフリカの藻類種を比較することにより生物地理学的に重要な知見が得られており、海洋でつながったグローバルレベルでの生物多様性の理解の一助となると思われる。また、こうした貴重な生物資源に関する種々の解析を進め、データベース化およびその公開を促進することによって、当該分野はもちろんのこと、これらの天然素材に含まれる生理活性成分の探索研究など、他の研究分野への波及効果も期待できる。

一方、本研究の目的の一つである日本と南アフリカで特に遺伝的に近い分類群(特に褐藻カヤモノリ科)について、バラスト水の影響や藻類種生育の特殊環境等に関する考察があればなお良かったと思われる。

(2)交流成果の評価について

日本と南アフリカメンバーの混成による「微細藻グループ」と「海洋藻グループ」の体制で、交流活動を日本で2回、南アフリカで3回実施しており、実質的な人的交流が有効になされた。毎回、学生が参加しており、人材育成・教育の観点、特に若手の英語発表能力を向上させる機会としたのは高く評価できる。

その一方で、予定していた「バーコーディング」に関するシンポジウムは開催されなかった。本プロジェクトから生まれた貴重な知見の公開と関連研究者間での情報・技術共有の機会を逸したのは残念であり、開催に至れなかった理由を示すべきであったように思う。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

研究交流期間内に発表された論文が5編あるが、何れも個別グループの個別テーマに関するものである。日本と南アフリカメンバーの混成による「微細藻グループ」と「海洋藻グループ」の体制をとったのであるから、両国研究者の共著による共同研究の形が目に見える必要があるのではないだろうか。